

# 植民地朝鮮の「孤立」された作家金来成と江戸川乱歩<sup>1</sup>

姜 泰 雄

## I、留学派金来成と彼の「孤立」

金来成は、一九〇九年朝鮮の平安南道で生まれ、一九三一年渡日し、早稲田大学の独法科に入学した。在学中に書いた短編「楕円形の鏡」が『ぶろふいる』に掲載され、彼は小説家としてデビューすることになる。『ぶろふいる』は、一九三三年創刊され一九三七年廃刊された探偵小説専門誌である。この雑誌は、江戸川乱歩、甲賀三郎、夢野久作など、当時の推理小説界を代表する作家に活動の場を提示しつつ、新人作家の発掘にも力を入れていた。<sup>2</sup> デビュー後、金来成は、江戸川乱歩の邸宅に二、三度訪ねたこともあり、探偵小説サークルの会合にも参加するなど、積極的な姿勢で作家業に取り組んだ。一九三六年早大の卒

業後、帰国した彼は、結婚と共に朝鮮における作家活動を本格的に始めた。翌年発表した『백가면(白仮面)』(一九三七)、そして、『마인(魔人)』(一九三九)の成功で、朝鮮を代表する推理小説家として名を馳せる。<sup>3</sup>

本稿が注目するのは、金来成が一九四〇年代に入って発表した一群の小説である。それらの小説の特徴は、朝鮮の京城を背景に展開されるスパイの諜報活動とそれの摘発に取り組む朝鮮人の探偵という構図を取っており、そこには「防諜」思想が入っていることである。「防諜」思想については、次節で論じることにして、これらの小説の粗筋を紹介しておこう。

まず一九三七年の『白仮面』からみてみよう。この作品も防諜思想の入っている一連の小説と共通点を持っている

る。『白仮面』は、髑髏の文様の白仮面を被っている者が、あらゆる鉄が引つ張れる磁石を発明した朝鮮人の博士を拉致する場面から始まる。この事件を解決するために、探偵「柳不乱」が登場する。彼は、世界各国のスパイたちが磁石の機密を盗み取るために、京城に潜り来ていることや、白仮面が悪人ではなく善人であり、スパイから博士を保護するために先に手を打ったことも知ることになる。白仮面の正体は誰であり、果たして柳不乱は博士や磁石の機密を守り切れるのか。このように空想ではあるが、最先端の武器をめぐって、探偵とスパイが対立するという構図は、一九四〇年代の小説にも継承される。

一九四二年の『태풍(台風)』では、破壊光線の機密をめぐっての諜報戦が繰り広げられる。

翌年の一九四三年発表されたラジオ放送用の小説の「싱고송하(刺繍された松鶴)」と「어떤 여간첩(ある女間諜)」には、柳不乱は登場しないが、スパイたちは、より日常的な場所、つまり、デパートの文房具コーナーや町内会を活動の場に行っている。

一九四三年七月から一九四四年四月まで『新時代』で連載された「売国奴」は、植民地朝鮮において唯一「防諜小説」という副題がついた作品である。この作品は『白仮面』

と似ていて、白い覆面を被ったホワイト・イーグルと柳不乱が、痕跡の残らない「殺人菌」を手に入れようとする国際スパイ組織に立ち向かう。

金来成の防諜思想が入っている小説や探偵小説が、韓国ではどのように評価されているかを見てみよう。韓国の研究者たちは、探偵小説の方へ重点を置く。鄭鍾賢は、その特徴を「核心的な技術を持っている者が朝鮮人であること、また、全世界に影響を与えうる事件が京城で行われるという設定などは、『朝鮮』という主体を『大東亜』や世界の中心として刻印しようとする作家の欲望が投影されている」といい、その「欲望」とは「被植民者が植民者に転身しようとする」ことであると説明する。<sup>4</sup>だが、鄭惠英はそうした「転身」には「無理」があるという。氏によれば、「日本でもなく、列強の租界がある中国の上海でもない、日本の植民地の一つに過ぎなかった朝鮮を、多国籍のスパイたちの激戦地として設定したことは、相当な無理がある」と判断し、金来成が朝鮮に帰ってからは、「そうした「奇妙な怪奇小説の創作」に変わったのは、「帝国志向的にならざるを得ない植民地の探偵文学の根本的な限界」に因ると指摘する。<sup>5</sup>

金来成の投影しようとした「作家の欲望」が何であり、

彼の作品が「奇妙な怪奇小説の創作」であるか否かを判断するためには、類似する小説との比較研究が必要であろう。残念ながら、彼と比較出来る探偵小説を書いた朝鮮の作家はいない。それでは、当時の日本で創作された小説との比較は可能ではないか。それも容易ではなさそうだ。金成妍によると、探偵小説が一九三〇年代後半から「日本では弾圧されたが、朝鮮では花を咲き始めた」ジャンルであるからだ。「国民同士での殺傷事件が描かれ、国内不安が煽られるという理由」で日本では探偵小説が弾圧されたが、朝鮮では「奨励」されたと、金成妍は主張する。氏は、日本では江戸川乱歩の全作品が一九四二年から発行出来なくなつたにもかかわらず、朝鮮の金来成は新聞の連載も継続していて、一九四四年には『台風』の単行本も出版出来たことを、「奨励」の根拠として取り上げる。「奨励」の理由としては、一九三八年の京城帝国大学の理工学部設置とともに、「銃後国民」として新たに位置づけられた朝鮮人に科学知識を身に着けることが求められ、そのメディアとして探偵小説が機能したからであるという。<sup>6</sup>

比較出来る朝鮮と日本の探偵小説が「ない」ということから、金来成の作品に影響を与えたとして、従来の研究で頻繁に言及されているのが、モーリス・ルブラン (Maurice

Leblanc)、アレクサンドル・デュマ (Alexandre Dumas) のようなフランスの作家である。金来成の小説の主なキャラクターである探偵「柳不乱 (韓国語の発音で、ユブラン)」は、アルセーヌ・ルパンの生みの親であるモーリス・ルブランを尊敬して、彼の名前に因んだものである。<sup>7</sup> また、海外でのあらゆる苦勞を耐え忍んだ後、復讐のために戻ってくる「白仮面」や「ホワイト・イーグル」というキャラクターは、アレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』の影響だという。<sup>8</sup> だが、こうしたフランス作家との比較は、金来成をより帝国日本において「孤立」させるばかりである。

以上のように、従来の研究では、「防諜」思想の入っている一九四〇年代の金来成の探偵小説が、彼の尊敬していた江戸川乱歩の作品、そして、『ぷろふいる』で同年代に活動していた作家の作品との比較がなされたことがない。こうした研究傾向は、金来成を朝鮮、引いては、帝国日本においても「奇妙な」作家として作り上げている。果たして金来成は「孤立」していたか。

本稿は、こうした疑問を二つの段階を通して解いていくことにする。最初の段階では、従来の研究の指摘のように、一九三〇年代後半以後の日本では、探偵小説が弾圧を受け

た結果、金来成の作品と比較出来るものが、本当に著されなかつたかを追究してみる。もし、比較出来る作品があるとしたら、二番目の段階に入り、彼の作品と江戸川乱歩を含む当時の日本の小説家の作品との共通点を引き出すことにする。こうした作業を通じて、金来成の「孤立」を解き放すことが、本稿の目的である。

## II、防諜思想と戦時期日本の探偵小説の在り方

陸軍防諜課の将校が著した一九四一年の『防諜講話』によると、防諜とは「諸外国の我が国に向つて行う秘密戦に対する防衛戦なり」と定義されている。秘密戦には、諜報・宣伝・謀略などの三つの手段があり、兵隊によつて行われる武力戦と同じように重要であると語られた。<sup>9</sup> 防諜思想が強調され始めた頃には、あまり馴染んでいないせいとか、「防諜」と聞かれると、「膨張」と間違えて「膨れる」ことだと答える兵隊もいたようだ。<sup>10</sup> しかし、一九四〇に入つては、スパイたちが「便所に落した紙屑まで買ひこんで洗つて消毒してみる」時代になっているから、防諜とは、警察官や憲兵のような公的な次元のみではなく、国民全員がやるべきことになっていく。<sup>11</sup> また、防諜思想の育成は、大人のみではなく、少年に対しても強調された。「少年時代か

ら、防諜精神を養つて置かなければならない」理由で刊行された、一九四三年の『少年防諜読本』は、家庭内で行われた会話を友達に話したのが意外と国の機密に関わるものである可能性もあるから、スパイは誰でもなれるのを警告している。<sup>12</sup>

金来成の小説には、こうした「防諜の日常化」とも言える防諜思想の普及の様子が表れている。一九四三年のラジオ放送用の短編小説の「ある女間諜」には、北京から出発した釜山行きの汽車のなかで、ある女性（実は、暗号名H八八号の女間諜）が次のように愚痴を言う。

「生活用品がだんだん手に入れにくくなっているね。砂糖がない。お米が足りない。味の素がない。こう行くと、やせて骨と皮ばかりになる人しか残らないね。」

この話を聞いた隣の老人が怒鳴る。

「そのような流言で騒ぐことが、立派なスパイ行為です！（中略）軍の秘密書類とか、発明の設計図のようなものを盗むことだけが、スパイではないです。我が国の団結力を弱めるあらゆる行為が、スパイ行動であることを分かつてく

ださい。スパイはそれを巧みに宣伝して、銃後の民心を不安に震わせる目的です。」(訳は、引用者)<sup>13</sup>

こうした登場人物の対話より、スパイが意外と身近な所にいるかも知れないし、日常的な会話もスパイ行為に当たるという防諜思想を、金来成が「ある女間諜」に取り入れることができる。

「ある女間諜」と同じ時期に書かれた「刺繍された松鶴」も「防諜の日常化」を強調する。デパートの文房具コーナーの店員は、合金のインク瓶の在庫を何回も聞く「ドイツ人」のマリエが、日本の鉄材の在庫を知ろうとするのではないかと疑う。彼女が書籍部で『京城重要建物史』を購入したことを聞いて、店員は彼女がスパイに間違いないと確信を持ち、警察に通報する。逮捕されたマリエは、実はドイツ人ではなく、イギリス人とユダヤ人の混血であった。彼女が上海の母に送るといつて持っていた松鶴文様の布には、モールス符号が点と線で刺繍されていた。それは京城の防空施設や砲台の位置を示す暗号であった。<sup>14</sup>

「防諜の日常化」は、「柳不乱」主役の探偵小説にも影響を与える。一九四四年の「売国奴」において、柳不乱が立ち向かう、新兵器の「殺人菌」を狙うスパイたちは、音楽

学院の院長や製薬会社の社員、商会の支配人、看護婦といった身近に人物ばかりである。「売国奴」の内容の詳しい分析は次節で論じることにして、ここでは、最初の段階に集中することにする。それは、金来成の作品と比較出来るような、防諜思想の入っている探偵小説が日本では著されていないかかったかのことである。

金来成の作品と関連して、多くの韓国の研究者が引用しているのは、関西学院大学の李健志教授の論文である。一九四〇年代の日本の推理小説の事情について韓国語で読める論文は数少ないので、氏の「일본의 추리소설 (日本の推理小説)」は、影響力がある。その論文では、当時の状況が次のように記されている。

「この小説は(江戸川乱歩の『芋虫』を指す、引用者)時局に適していないために、削除命令が出され(一九三九年三月)、一九四一年には『芋虫』のみではなく、彼のほぼすべての作品が発行禁止になった。このように日本の推理小説は、帝国時代に自由に成長することは出来なかった。」(訳は、引用者)<sup>15</sup>

李健志の当時の日本の推理小説に関する認識は、日本に

おいて一般的であろう。中公新書の『日本ミステリー小説史』（二〇一四年）を見てみよう。

「翌年（一九三九年、引用者）には戦時統制による出版検閲はさらに厳しくなり、乱歩などは内務省の検閲部に彼専用の係がいて、ひっきりなしに書き直しや削除が命ぜられ、既に発表していた作品まで絶版の憂き目にあう。ミステリーの発注は激減し、そうした出版界の傾向に伴ってミステリー作家たちも方向転換を余儀なくされる。そして戦争ものや、捕物帳、時代物などの方面でからも作品を発表するようになった。」<sup>16</sup>

ここでも李健志の論文のように、当時の日本において推理小説家の活動の場はなかったということが示されている。韓国の研究者たちは、日本の状況とは違って、金来成は朝鮮において小説を書き続けたし、単行本（一九四四年『台風』）も発行できたから、日本との比較の方には目が行かなかったのである。

ここで日本の状況について詳しく論じて見よう。まず『日本ミステリー小説史』は、戦時統制により「ミステリーの発注は激減し」、ミステリー作家たちが「戦争ものや、捕

物帳、時代物」へ「方向転換」したという。だが、ミステリー小説というのは、謎を解いていくことだから、それは「戦争もの」においても「時代もの」においても可能である。それに「捕物帳」とは、「時代物」のミステリーではないか。また、当局の検閲が、ほかのジャンルではなく、「ミステリー」に向けられた理由も示されていない。

ここで、李健志の文章に戻ってみよう。氏は、一九三九年三月の「芋虫」の削除事件以後、江戸川乱歩の「ほぼすべての作品が発行禁止になった」という。しかし、当時の新聞記事によると、警視庁の検閲課の命じたのは、「芋虫」の削除であって、それが収まっている春陽堂文庫の『鏡地獄』の発行禁止ではなかった。<sup>17</sup>

また、江戸川乱歩は、その年の一月から『少年倶楽部』に連載していた「大金塊」を辞めることなく、年末まで書き続けた。翌年の四月からは、『少年倶楽部』の新連載として「新宝島」を始め、一九四一年三月に終える。一九四二年一月から一九四三年四月までは、同じく『少年倶楽部』において「智恵の太郎」を連載した。そして、一九四三年一月から一九四四年二月まで「防諜長編小説」という副題がついた「偉大なる夢」を書くことになる。

「偉大なる夢」は、金来成の防諜思想の入っている探偵小

説と比較出来る作品であろうか。この小説では、東京からニューヨーク、そして東京からロンドンを五時間で飛んでいける飛行機のエンジンを発明した五十嵐博士がスパイの標的となる。五十嵐博士は、「偉大なる夢」について、次のように語る。

「エ、新一、わしがこれほど興奮している意味が分るかね。陸軍大臣が顔色を変えたほんとうの意味が分るかね。わしの動力は、成層圏という無抵抗の通路を勘定に入れなくても、現にどこの国の飛行機でも飛んでいる亜成層圏を通るとしても、東京ニューヨーク間を五時間で飛べるだよ。五時間だよ。エ、新一、あらゆる細部にわたる精密な計算がこれを確証しているのだ。本田少将がおどり出した意味がここにあるのだよ。」

一千台の新爆撃機が、翼を揃えてニューヨークの空に殺到する日を考えてごらん。ロンドンの空を蔽うときを考えてごらん。国民が快哉を絶叫する声が聞こえるようじゃないか。」<sup>18</sup>

この小説において「偉大なる夢」とは、想像もできない速い時間でアメリカとイギリスを飛んで行き爆撃できる飛

行機の完成である。こうした「夢」を成し遂げるために、五十嵐博士は憲兵司令部から派遣された下士官に守られている山奥で、研究を続けていく。しかし、スパイは五十嵐博士を殺すことに成功する。

中島河太郎は、「探偵小説の執筆が事実上禁止され」、江戸川乱歩は「偉大なる夢」のような「科学的な作品に逃避」したと書いている。<sup>19</sup> 中島河太郎の主張も先述した論者たちのと似ている。「偉大なる夢」が科学小説であるか否かはともかくとして、探偵小説や推理小説は、科学小説と相反する概念ではない。科学的な知識や空間を背景として、探偵が推理をする作品は多い。「偉大なる夢」においても、職業が探偵ではなく憲兵ではあるが、望月少佐が五十嵐博士を誰がどうやって殺したかというミステリーを推理して行く。それに、江戸川乱歩本人は、この小説について次のように回想する。

「わたしはここで（『偉大なる夢』、引用者）『犯人自身がその犯行を遠方から目撃して不動のアリバイを作るトリック』を用いたのである。（むろんこれも望月少佐が看破するだが）このトリックは、当時わたしの知っている限りでは、西洋の探偵小説にも先例がなかった。わたしの発明だと信

じて、いささか得意であった。<sup>20</sup>

この回想からも、江戸川乱歩が「探偵小説」から「科学小説的な作品に逃避」したくて「偉大なる夢」を書いたとは思えない。

スパイの活躍とそれに立ち向かう探偵という構図の小説は、江戸川乱歩のみではなく、当時の「流行」のテーマであった。江戸川乱歩のライバルとも言われた甲賀三郎は、日本文学報国会の事務局の総務部長を務めた。甲賀三郎は、女探偵が中国服を着ている女スパイと対決する「支那服の女」（一九四二年）、日本在留のイギリス人スパイがドイツ人に偽装して、秘密資料を上海に持つていこうと試みる「旅券」（一九四二年）などを書いた。また、従軍作家としてマレーシアに派遣されていた小栗蟲太郎は、その経験を生かして、一九四三年三月の『新青年』に「探偵小説 海峡天地会」を発表する。南洋の華僑で構成された秘密団体の天地会の首長がマレーシアに潜入する諜報が入ってくる。彼を逮捕するための日本軍の作戦を手伝う探偵が物語の主人公である。<sup>21</sup>

このように一九三〇年代後半以後、防諜思想の入っている小説が多く創作されていた。物語の展開方式から見ると、

と、これらを推理小説ではないとは言えない。日中戦争の勃発や国家総動員令がくだされ、推理小説家の活動の領域が狭くなったのは当然だ。だといって、探偵小説や推理小説というジャンル自体が当時「禁止」され、他のジャンルへ「転換」及び「逃避」したという既存研究の見方には、再考が必要であろう。それより、小説家たちは、防諜思想のような時局を反映している素材を、推理小説に取り入れることになったと捉えられるべきではないか。そうなること、金来成と当時の日本の小説家との距離が縮まってくる。

### Ⅲ、金来成の作品と日本の小説との比較

従来の研究とは異なり、金来成の作品と比較出来るものが、日本にあることから、二番目の段階に入ろう。それは、金来成の「孤立」を解き放すために、彼の作品と当時の日本の小説との共通点を引き出すことである。まず、金来成と同年代の作家との比較から始めよう。

金来成のデビュー作である「楕円形の鏡」が掲載された一九三五年三月号の『ぷろふいる』に、「雪解け」が載せられた大阪圭吉は、金来成より三つ年下であるが、作家デビューは二年早かった。<sup>22</sup> 一九四〇年一〇月の『講談倶楽



部』に掲載された彼の短編「東京第五部隊」の舞台は、丸の内にある帝都劇場である。そこで日本人とドイツ人の混血の舞姫、ケティー岸田がタップ・ダンス公演で観客を魅了している。劇場の案内ガールの春樹もと子は、毎日公演を見に来て、居眠りばかりして帰る外国人観客のことが気になる。春樹は、国民防諜会の展覧会で「少しでも怪しい挙動の外人があったら警戒せよ」と教わったのを思い出し、外国人観客の後を追う。そうした彼女の行為で、舞姫のケティー岸田を含むスパイ組織が一網打尽にされる。ケティー岸田は秘密通信文をモールス符号にして、タップ・ダンスのステップで外国人観客に伝えていた。彼は、文房具の間屋であるメーソン商会を営むイギリス人のスパイであり、居眠りしたのではなく、目を閉じて、ステップの音に集中したのである。<sup>23</sup>

翌月の一九四〇年十一月、大阪圭吉は「金髪美容師」を雑誌『キング』に発表する。ここでは、大阪のクラブ美容院が舞台である。院長のニューヨーク美容大学出身のヘレンは、パーマをかけた顧客には、「サービス券」を配る。その「サービス券」は、全国に六つある支店でも使えるものである。ある顧客が、「サービス券」の裏面に秘密コードが書いてあることに気が付く。ヘレンは、「サービス券」を通

して機密を全国に伝達するスパイ行為をしていたのである。<sup>24</sup> 以上のように、大阪圭吉の一連の作品から表れる、一般人が日常生活に潜っているスパイを見つけ出すというテーマは、金来成のデパートの文房具コーナの職員を主人公にする「刺繍された松鶴」や汽車内の日常会話からデマを散らかすスパイが描かれた「ある女間諜」と類似している。

それに、「東京第五部隊」においてタップ・ダンスのステップで秘密通信文をモールス符号にして送るという手口は、金来成の「売国奴」で高麗音楽学院の院長のエリザが、秘密情報をピアノの旋律に変えて受話器を通じて伝える方式を思い出させる。また、金来成の小説の探偵柳不乱のように、大阪圭吉の作品にも『仮面の親日』（一九四一年）、『海底諜報局』（一九四一年）、『間諜満州にあり』（一九四二年）などで、ミステリーを推理していく探偵横川貞介というキャラクターが登場する。柳不乱が「売国奴」で愛国防諜協会の会長を務めるように、横川貞介も国民防諜会議の会長である。それは、一九三七年の軍機保護法の改正の後、全国的に「防諜会」、「防諜団」という名の団体が結成されていった状況が反映されただろう。<sup>25</sup>

江戸川乱歩の「偉大なる夢」に戻ってみよう。五十嵐博

士の死亡や設計図の奪取を行ったスパイ団の黒幕には、「F3」という暗号名で活躍する者がいる。彼は、幕末の開港と共に横浜に來たアメリカ人の四代目であった。しかし、彼は、母の入院していた病院がアメリカの飛行機に爆撃された時、改心して次のように思う。

「正確に言えば僕の体内にはアメリカ人の血は八分の一しか残っていない。八分の七までが日本人の血ではないか。」<sup>26</sup>

こう思った「F3」は、スパイ団の一網打尽に協力することになる。このように五時間でアメリカやイギリスに飛べる飛行機という空想的な武器の登場、それをめぐって繰り広げられるスパイ団の活躍、それに立ち向かう探偵、また、自分に日本人の血が流れていることを悟って改心する一人のスパイ、これらが「偉大なる夢」の設定の特徴である。

これを金来成の「台風」と比較してみよう。「台風」では、恐ろしい威力を持つ破壊光線が空想的な武器として登場する。その情報を獲得するために動く国際的なスパイ組織の中で、イボンヌがいる。孤児として育ち、親のことを

知らなかった彼女は、逮捕されて初めて朝鮮人の船乗りと「モンテ・クリスト・クラブ」のフランス人の舞姫の間で生まれたことを知る。自分に朝鮮人の血が流れていることを分かる途端、彼女はスパイであることを諦める。

また、金来成の「売国奴」も類似している設定を持っている。この作品の武器は「殺人菌」であり、それを口にした人間は一時間以内に必ず死ぬが、その原因は究明出来ないという空想的なものである。それを盗み取るために、高麗音楽学院の院長のエリザやマルセ商会の京城支店長のベッセ、ニコラス神父などの多国籍のスパイ組織が取り組む。だが、「殺人菌」がある病院に潜入する人は、上海から派遣された朝鮮語を話せる「国籍不明」の女スパイ「K13号」である。もし「売国奴」が未完で終わらなかつたら、「K13号」も自分の血に朝鮮人の血が流れることを知る運びになっただろう。

そうした設定は、当時の映画にも見つけることが出来る。一九四二年封切りされた山本弘之監督の映画「第五列の恐怖」では（脚本は北村勉）、空想的な武器として「無音発動機」が登場する。それが飛行機に装着されれば、音無しで敵地まで行けるのである。その「無音発動機」の情報を獲得するために、上海から來た女スパイの「YZ7号」が

東京の航空工場のタイピストとして潜入する。彼女は自分を中国人の父と日本人の母の間で生まれた混血だと信じていた。しかし、逮捕された彼女に、憲兵隊の少佐は軍服姿の父親が映っている家族写真を見せ、実は彼女の父は、日本人であることを知らせる。改心した「YZ7号」は、航空工場に設置された時限爆弾を解体しに走る。

江戸川乱歩や金来成の用いた設定が、当時の映画からも見つかるということに、この設定の原型を探る手掛かりがあるかも知れない。まず混血の女スパイは、かの有名な「マタ・ハリ」の影響であろう。現在は混血ではなく、両親共にオランダ人であることが判明されたが、戦前においては、彼女は「オランダ人とオランダ領のジャワ島の土人女の間で生れた混血児で、その神秘に満ちた東洋的な風貌」として知られていた。<sup>27</sup>それに、アン・リー監督の映画「ラスト・コーション(色・戒)」のモデルになった女スパイの鄭蘋如も、中国人と日本人の混血であって、彼女をモデルにした成瀬巳喜男監督の映画「上海の月」(一九四一年)が製作されたこともある。<sup>28</sup>

「マタ・ハリ」の映画は、一九二九年日本で公開されたが、より人気のある作品は、「マタ・ハリ」の影響を受けた、マレーネ・ディートリヒ主演の「間諜X27

(Dishonored)」(一九三一年日本公開)であった。「間諜X27」の人氣は、冷めることなく、五年後の一九三六年に再公開された。その時には、監督のジョセフ・フォン・スタンバーグが来日した。<sup>29</sup>「間諜X27」には、マレーネ・ディートリヒがパーティで盗み取った機密情報を、楽譜の音符に切り替え、ピアノを弾きながら再現するシーンがある。「第五列の恐怖」においても、轟夕起子の扮する「YZ7号」が、宴会場で得た情報をピアノ演奏で伝達する場面がある。こうした手口は、先述したように、大阪圭吉の「東京第五部隊」においてのタップ・ダンスや、金来成の「売国奴」でピアノを利用して機密を伝達するのと似ていることは、言うまでもないだろう。

#### IV、結びに

植民地朝鮮において有名作家であった金来成は、一九四〇年代前後に、防諜思想の入っている推理小説を書いた。朝鮮では、比較される作家や作品がなかったし、日本では、推理小説が当局に「弾圧」された状況に置かれたということと、金来成は朝鮮のみではなく、帝国日本において「孤立」していた作家として研究されてきた。

本稿は、彼を「孤立」から解き放すために、まず日本に

おいても類似している作品が多く創作されていたことを明らかにした。それによって、金来成の作品は、当時の日本の小説と比較可能になり、そこから、映画ともつながる多彩なる類似点を見つけ出すことが出来た。金来成は、植民地朝鮮の「孤立」した者ではなく、むしろ、当時の創作上の「流行」を朝鮮の誰よりも早く追いついた作家として再評価されるべきではないだろうか。

【注】

- 1 本稿は、『비교일문학(比較日文学)』(漢陽大学日文学国際比較研究所、ソウル、二〇一五)三五号に掲載された論文を、日本語に訳しながら修正したものである。
- 2 吉田司雄『ぶろふいる』解説『ぶろふいるカタログ』ゆまに書房、二〇〇九、五頁。
- 3 松川良宏「解題」『金来成探偵小説選』論創社、二〇一四、三八七—四二四頁。『金来成探偵小説選』には、「楕円形の鏡」が含まれている。
- 4 鄭鍾賢『동양론과 식민지 조선문학(東洋論と植民地の朝鮮文学)』창비、二〇一一、三一一—三二二頁。
- 5 鄭惠英『방첩소설『매국노』와 식민지 탐정문학의 운명』(防諜小説『売国奴』と植民地探偵文学の運命)『한국의현대문학연구』二四号、二〇〇八、二八八頁及び二九四頁。
- 6 金成妍『방첩소설, 조선의 총동원체제와 국민 오락의 조건』(防諜小説、朝鮮の総動員体制と国民娯楽の条件)『인문과학연구논총』三七号、二〇一四、二一九—二二三頁。
- 7 金成妍、前掲論文、二二八頁。
- 8 鄭鍾賢、前掲書、二九〇頁。
- 9 陸軍防諜課陸軍中佐 大坪義勢『防諜講話』大日本雄辯會講談社、一九四一a、一一—一六頁。
- 10 陸軍防諜課陸軍中佐 大坪義勢『スパイは何処にあるか——わかり易い防諜の話』名古屋新聞社、一九四一b、一—二頁。
- 11 大坪義勢、前掲書、一九四一b、二五頁。
- 12 樋口紅陽『少年防諜読本』金鈴社、一九四三、二頁。
- 13 金来成『어떤 여간첩(ある女間諜)』李弘基編『放送小説名作選』朝鮮出版社、一九四三、二七三—二七九頁。
- 14 金来成『수놓은 송학(刺繡された松鶴)』李弘基編、前掲書、二四五—二七〇頁。
- 15 李健志『일본의 추리소설(日本の推理小説)』대중문학연구회편『추리소설이란 무엇인가(推理小説とは何か)』국학연구원, 一九九七、一二七頁。
- 16 堀啓子『日本ミステリー小説史』中公新書、二〇一四、二二〇頁。
- 17 『朝日新聞』一九三九年四月一日(夕刊)、二面。
- 18 江戸川乱歩『偉大なる夢』『江戸川乱歩全集 第一四卷』光文社文庫、二〇〇四、三四九頁。
- 19 中島河太郎『日本探偵小説史』『日本探偵小説全集一二 名作集

- 二』創元推理文庫、一九九九、七三八―七三九頁。
- 20 江戸川乱歩『探偵小説四十年』桃源社、一九六一（『江戸川乱歩全集 第二九卷』光文社文庫、二〇〇六に再録）、一二八一―一二九頁。
- 21 池田浩士『海外進出文学』論・序説』インパクト出版会、一九九七、三二―四五頁。
- 22 大阪圭吉は、一九三二年『新青年』一〇月号に、「デパートの絞刑吏」という作品でデビューした。横井司「解題」『大阪圭吉探偵小説選』論創社、二〇一〇、三九六頁。
- 23 「東京第五部隊」は、大阪圭吉『大阪圭吉探偵小説選』二〇一〇、論創社、一―二〇頁に再録されてある。
- 24 大阪圭吉、「金髪美容師」『大阪圭吉探偵小説選』論創社、二〇一〇、二一―三八頁。
- 25 瀧藤厚『防諜政策と民衆』昭和出版、一九九一、八四―九一頁。
- 26 江戸川乱歩「偉大なる夢」、前掲書、五三七頁。
- 27 平路社編『欧米スパイ物語』平路社、一九三五、五〇頁。
- 28 高橋信也『魔都上海に生きた女間諜』平凡社新書、二〇一一、二三―三四頁。
- 29 『読売新聞』一九三六年八月二三日、七面。

（光云大学文化産業学部教授、現在、立教大学異文化コミュニケーション学部客員研究員）